

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 16

学校名・団体名	本庄市立児玉小学校
HPアドレス	http://edu-honjo.com/kodamasyo
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	児童に地域から学び続ける心を育む総合学習

〈活動・研究の意義、目的〉

本校が位置する埼玉県本庄市の旧児玉地域は、中世以前からの歴史が深い地域である。以前行っていた総合学習の導入では、「郷土かるた」から、子どもたち一人ひとりが調べる内容を決定し、学習を展開する単元構成となっていた。しかし、町全体を「決まった数」で作らねばならない郷土かるたの特質を「学区の地域学習」に当てはめると、結果的に、学区内の貴重な文化遺産が子どもたちの視野に入らない現実があった。そこで、地域の方々から聞き取りを行いながら、子どもたちとともに文化遺産を見つけていくことを主眼に学習を展開することにした。身近な祖父母やお年寄りからの聞き取り活動や現地での取材活動を単元に盛り込み、自分の住む近くの文化遺産にもう一度出会い直せるようにした。子どもたちの足元の文化遺産への驚きは、次なる学びへの意欲をうながし、子どもたちに主体的な学びの心が持続されるだろうと考え、本研究の目的を、「子どもたちに地域から学び続ける心を育む総合学習」と設定した。

「子どもたちに地域から学び続ける心を育む総合学習の実際」

1 はじめに～地域学習研究の前提として～

あと4年で創立150年を迎える本校は、地域の方々に支えられ、脈々と地に根をはり、地域の中の学校として歴史を刻んできた。そして、現在、400名を超える子どもたちが、地域の中ですくすくと育っている。今回の研究が進むにつれて、学校の取組はそもそも地域の方々の思いや願いなしには進みえないということが分かってきた。地域学習は、地域の方々の思いや願いを前提としてはじめて成立することもここ数年の研究の中で明らかにされつつある。地域の方々に支えられた本校の地域学習のあゆみと子どもたちの変容を追う。

2 本実践について

(1) 3年生総合学習 年間計画「見たい! 知りたい! 私たちの児玉!!」

① 1学期「見たい! 知りたい! 私たちの児玉!!」(地域学習)

学校の片隅にある「大山沖太郎頌徳碑」を資料として、教室での予想と現地調査をつなげる取組を行った。また、学校のまわりを歩き、文化財を見て回る体験学習を多く取り入れ、教室で学んだり調べたりしたことを再確認できるようにした。

② 2学期「祭り囃子」

本校では総合的な学習の時間が始まってから地域の保存会の方の支えを得ながら、毎年祭り囃子発表会を行っている。

③ 3学期 関連教科 社会科「のこしたいもの、つたえたいもの」

今年度からの取組として、1学期に一応の完結を見ていた地域学習を、3学期の社会科「地域の文化を知ろう」と関連させ、年間を通した地域学習の継続を可能にした。その上で、子どもたちに、調べた場所の「カルタづくり」をうながした。調査した場所を元に、新たな「児玉学区 宝の地図」作りを行い、今後の地域学習の発展に役立てるように、計画を立てた。

(2) 研究テーマとの関連

本実践のテーマを、「子どもたちに地域から学び続ける心を育む総合学習」とした。まずは、教職員自ら、地域の方々から学び続ける姿勢を持ち、文化財の価値性と子どもたちとともに考えていくことにした。子どもたちに身近な地域の方々への聞き取り作業をうながし、分かったことを子どもたちに返していく。この循環が、子どもたちの意欲を持続させるだろうと考えた。

3 実践を通した子どもたちの変容

(1) 地域学習

子どもたちが、実際に現地に赴いたり、祖父母や近所の地域の方からの聞き取りを行ったりした。調査内容を、「リサーチカード」に記した。その内容をもとに、授業の中で極力取り上げた。子どもたちの次時への意欲がつながることを願った。聞き取りの中から様々な子どもたちの姿が見えてきた。

① 瓦産業

「郷土かるた」にある「土生かし児玉の伝統 屋根瓦」という句を通し、ある子が、校歌の一節にある「土を育てた身馴川」に着目した。身馴川が運ぶ土は、屋根瓦のもととなっていたことを祖母から語り伝えられていたのである。このことから、身馴川の存在が屋根瓦の産業と関わっていたことに子どもたちは気づいていった。

② 養蚕業

児玉は、昔から養蚕がさかんであり、江戸時代後期、横浜開港後には、この地の鎌倉街道を通じて、大量の絹糸が運ばれていた。学区には明治期に、養蚕学校の先駆けとなった競進社模範蚕室が今も残っている。地域には、今も明治当時に建てた蚕室が残っている。この蚕室で蚕の実演飼育をする方がおり、学校に多大な協力をしていただいた。土日の実演飼育に、たくさ

んの子が足を運んだ。最初はおそるおそる蚕を触っていたが慣れると、蚕をかわいがる子、熱心に観察する子が現れた。「この子は色んなことによく気づくねえ」という地域の方のつぶやきから子どもの豊かな感性に再度出会い直すことができた。3学年合同での訪問が実現し、体験の中で、つづる子どもたちのリサーチカードは、生き生きとはずむようであった。訪問後も、土日、たくさんの子が蚕室に足を運んだ。実際に蚕を自宅で飼って繭にする子も出てきた。また、地域の方の協力のもと、藤岡から講師を招いて、地域の方の蚕室での糸取り体験も実現した。「足元の歴史を大事にして、この地域が好きな子が育つといいね」と毎回エールを送っていただいている。

③米作りの歴史

子どもたちが調べたりサーチカードの中に、いくつもの池の存在から、児玉には、縄文から湧き出ている清水がいくつもあることが分かってきた。この湧き水のまわりに人々は住み、トチの実を調理したという事実が発掘からも明らかになっている。天水を出発点として、農業用水を使っている米作りの歴史は、現在に連綿と続いている。天水のまわりには、天水を大切にしてきた人々の熱い思いがあることに気づいた。ある子は、近所の土地改良の碑について聞き取り調査を行い、「この池は、田に水を送っているありがたい池なのだ」と普段何気なく見ていた碑の価値を再認識した。

(2) 祭り囃子

毎年2学期の総合学習は祭り囃子発表会に向けての練習が行われる。まずは、各町を訪問し、山車やお囃子、祭りの歴史などを聞き取る。「『お祭りをすると神様は喜ぶのですか』という質問には目ん玉が飛び出るほどおどろいたよ」と地域の方が子どもたちの発想に驚いた。聞き取りの後1ヶ月半、祭り囃子の練習を全面的にバックアップしてくださるのが保存会の方々だ。毎週、子どもたちに時に優しく、時に厳しく教えてくださる地域の方から、教職員も学ぶことがとても多い。地域の方の優しさに触れながら子どもたちは当日の発表を迎える。「子どもたち、立派に出来ました。よくほめてあげてください。」目に涙を浮かべ親御さんに呼びかける地域の方から、子どもに向けた「あたたかなまなざし」の大切さを学んだ。

(3) 社会科「地域の宝」

今まで聞き取りして来た児玉の歴史をもう一度社会科の授業において、再確認し、自分が調べた場所について、「児玉小郷土かるた」を作ることを行なう。1学期、2学期と行って来てリサーチした児玉の宝をもう一度話し合い、句にしていく。そして、その集大成として、「児玉小宝の地図」が子どもたちの聞き取りをもとに出来上がった。

4 まとめ

学区の文化財を子どもとともに探す中で、たくさんの方々と出会うことができた。そして、子どもたちが調べてきたリサーチカードにつづられた文化財を一つひとつ地図に落としていったのが、手作業で作って来た地図が、イラストマップとして完成した。

この地図作成は、親御さんをはじめとした地域の方々の出会いと支えなしにはできなかったものである。今後も、「宝の地図」を活用し、子どもたちに地域から学び続ける心を育み続けていきたい。



子どもたちの聞き取り調査を元に、ついに完成した「宝の地図」